

農業における「普遍」について

1920年代の初期, 80年以上も前のはなしである。今と違って, 私たちの先輩が学問に対して十分に畏敬の念をもって接し, 学問の性格とか領域などといったことを, ひどく真面目に考えていた時代のことである。国立の某大学のこととしておこう。

その大学に新たに農学部を設置することの是非をめぐって, 評議員会のようなところで審議が続いたらしい。すでに東大や北大には農学部があったのが, この大学には存在しなかった。

結論がなかなか出なかったのは, 果たして農業というのは学問の対象と考えられるのか, その研究にサイエンスと称する上での最低の条件, たとえば普遍的論理や方法論的な独自性が存在するのかなどをめぐって議論がとりかわされたい。明治中期の大学創設以来, 内外の哲学や史学の領域に多くの碩学・論客を集めていたその大学のことだから, おそらくは, ひどく難しい学問論がやりとりされたに違いない。

何回目かの会議の席で, ひとりの教授が発言をされたという。「...しかし, すでに先年, 経済学部でさえ設置されていることだし, いまさら純粋に学問論の立場から農学部を認めないというのは筋が通らないのではないか」。(ということは, この大学では経済学部設置をめぐっても, 同じような議論がされていたことになる。まさに隔世の感がある)。

いずれにしても, この発言によって, 長い会議の決着がついたと聞き及ぶ。なにか, できすぎたはなしのようでもあるが, 少なくともこれに近いやりとりから, その大学では農学部が「無事に」誕生したと, 往時のことを知る老先生から伺ったことがある。

この稿において, さらに農学や経済学が学問の名に値するかどうかなどの議論を続けようとは思わない。しかし, 「農学は学問か」と問いただされた80年前の議論をふりかえってみて, 農業における「普遍」というあたりをすこし考えてみる。農業には普遍性が存在しないのではないかという認識が, それを学問とは考えないとする主張の根拠にあったことは上に触れた。

あらためていうまでもないが, 世界のそれぞれの地域, また民族なり集団が営む農業

の形態はきわめて多様で、極端に言えば、この地球上に2つとして同じ事例は存在しないといってよい。それぞれの地における自然的環境や立地などに制約されて農業が行われる限り、きわめて当然な結果であろう。

その限りににおいて、農業における普遍性ということは、厳密には考えにくいともいえる。近世以来、わが国の農業の研究は「地方（ぢかた）学」などともいわれて、土地ごとに異なる姿を示す農業の特殊性、個別性などを探求することが重んじられてきた。近世を通じての諸農書の性格もほとんどがそれであったといってよい。そうした潮流が当時の評議員の諸先生たちの農業認識にも通じるころがあったのではないかと思われる。

しかし、その大学で農学部開設の論議が行われていた頃よりもしばらく前から、日本の農業研究には西欧近代の考え方が急速に浸透し始めていた。西欧近代農学は、農業をして「最小限の投資をもって最大限の収量を、最小限の労力によって最大限の収益を獲得することを目標とする生物生産」のように規定することから、世界を通じて経済合理性をもって至上の原理とする、ひとつの普遍的農業観を定着させようとしていた。この方向で、農業は近代科学の対象としての立場を次第に確立して今日に至ったといえる。

こうした立場からの諸研究の総合結果として、今、60億の人間が、ひとまずは危機的な食糧不足から免れていることは認めなければならない。しかし、科学が両刃の剣である事情は農業でも同じで、経済的効率を最優先する近代農業の拡大は、ご承知のように世界の環境維持や資源循環、食品の安全性などにきわめて好ましくない影響を与え続けながら20世紀を終えた。

急いで結論を述べると、21世紀にも人類の生存を続けて保証する農業のありかたは、既成の近代的な「普遍」の論理だけをもってしてはほとんど望みがたいであろう。世界の農業がまさに転換期を前にしているといえる。

（京都大学名誉教授 渡部忠世・わたべただよ）